

前号を読んで

## 手間と時間のかかること

木野泰伸

ビジネス科学研究科准教授

前号では、国立大学法人化に伴った取り組みが多く紹介されていた。その中には、良い面だけでなく課題点も指摘されており、改めて今後大学がどうあるべきか、また教育とはどうあるべきかを考える良いきっかけとなった。

私は企業で約15年間、業務ソフトウェアの開発に携わり、2年前に筑波大学の教員となった。ソフトウェア開発プロジェクトでは、技術的な知識やスキルが必要である。近年、企業から、即戦力となる人材が欲しいとの要望がある。そのため、大学のカリキュラムには、基礎的なものだけでなく、技術的に新しく実践的なものが増え、一定の成果が出てきたように思う。しかし、プロジェクトの現場では、技術的な知識やスキルだけでは不十分である。

仕事においては、技術的な能力と共に、自分自身で考え行動する力、問題や異変を早期に感じとる力、チームとして仕事をす

るうえでの責任感やコミュニケーション力など、社会的な能力も必要である。

実社会で必要とされるこれらの能力は、理論を学ぶだけで身に付くものではない。何かに全力でチャレンジし、人とぶつかりながら、人生を通じて身につけていくものである。近年の大学改革では、実践的な面ばかりが強調されているが、むしろ、大学はこのような能力を育成することに本来の使命があるのではなからうか。

大学において、学生は、一方的に与えられたものを学習するのではなく、自分の意思で考え、行動することが求められる。例えば、ゼミにおける研究や論文の執筆は、学生が主体となり、課題を探し、文献を調査し、友人や教員と議論を交わしながら作成していく。このような行為は、学生にとって負荷が大きいと同時に、教員にとっても労力と時間のかかる作業である。しかも、指導の良し悪しは、数値化することが難しく、評価しにくい。また、学生自身も、これら一連の作業によって能力が身に付いたかどうか直ぐに判断することはできない。

このように、大学での勉強には手間ひまがかかる上に、結果も見えないものが多い。しかし、このような手間のかかることにこそ価値があり、大学には、そのような教育が期待されていると思う。  
(きのやすのぶ/プロジェクトマネジメント)